千葉あいご

Vol. 86

Index

1 2 3　令和５年度自立支援セミナー報告
4　令和５年度障害児支援セミナー報告
5　権利擁護委員会主催研修報告
6　わが施設の自慢・アピールポイント㊹
7　新事業所紹介／「第51回手をつなぐ作品展」を終えて
8　千葉知協トピックス
8　事務局だより・編集後記

第86号（2024年3月号）　発行日：2024年3月20日／発行者：里見吉英／編集者：畠山正昭・菅谷大輔・成川　真

発行所：千葉県知的障害者福祉協会

［本　部］　千葉市中央区中央3-15-6　山長（ヤマチョウ）ビル4F　TEL 043-224-5721　HP https://caid-net.com/

［事務局］　船橋市金堀町499-1　大久保学園内　TEL 047-457-2462

令和5年度 自立支援セミナー報告

令和６年１月27日千葉市文化センターにおいて、４年ぶりに自立支援セミナーが３８０名の参加者を迎え開催されました。コロナ禍で、多くのことが自粛となり耐え忍んできましたが、そんな中でも私たちは前に進んでまいりました。感染症だけではなく、世界で起きている様々なことから、生活環境が大きく変わってきています。また、求められるニーズも複雑且つ多様化している事業所からの発表と、持病を抱えながら落語界で活躍されておられる江戸屋猫八氏の講演が行われました。

●挨拶――会長　里見吉英

４年ぶりの開催になり、コロナ禍、大変窮屈な生活を利用者も職員もしていた中で、一生懸命支援をしてきた職員の皆さんに敬意を表したいと思います。

元旦から能登で大きな震災に見舞われ、協会も厚労省と打ち合わせを行ない、対策を練っています。ただ動いても相手に迷惑がかかりますので、まずは厚労省からの要請もあり職員を現地に派遣し、さらに日本知的から石川県の協会に送金をしました。それと並行し、会員施設に義援金の協力をお願いしております。遠い我々には、資金援助が一番良い方法ではないかと思います。

里見会長挨拶

挨拶の中で、現段階での報酬改定について話がありました。厚労省との折衝でかなり厳しい状況の中、障害分野では報酬改定率約１・５％（処遇改善加算含む）の改定になること、主な変更点として、食事提供体制加算では栄養面での配慮が必要になること、生活介護等が時間単価になること、施設入所支援は全入所者に対し、地域移行及び施設外の日中活動利用の意向を確認すること、グループホームについては様々な経営主体の参入により、年々増加する中、総量規制の在り方が検討されていくこと等の話がありました。

●報告――社会福祉法人りべるたす　理事長　伊藤佳世子

基幹相談支援センターは千葉市６区に令和２年10月にできました。現在千葉県でも50数ヶ所あります。普段は、月～土勤務ですが、24時間３６５日、緊急時は対応をしています。センターへの相談は、10歳未満だと療育の相談、10代だと進路や療育の相談、20代、30代は若者の就職先や居場所の問題、40歳を過ぎると、親が少し高齢になり支援力が落ちてきて、家にいることが困難になります。50代を超えると、８０５０問題があり、高齢の親と子供がいて、親亡き後をどうするかの相談が多くあります。

障害種別としては、精神障害の方からの相談が一番多く、２割の方は障害グレーゾーンの方で、生き辛さを抱える等の相談があります。知的障害の方は、療育や受入れ先、８０５０の相談が多くあります。８０５０に関しては、早期発見、早期対応が重要で、関係機関から早めに連絡を頂くことが必要です。

最近、重層的支援体制整備事業が各地で始まり、千葉市でもどこに相談していいか分からない方々が相談できる「福祉まるごとサポートセンター」を作りました。そこで一括して相談を受けています。「福祉まるごとサポートセンター」には、ヤングケアラーや８０５０問題等の複合的な課題を抱えている方の相談が多くあります。一方で障害分野では入所施設を探しているが見つからない相談もあり、これがなかなか解決できない相談だと思います。

千葉県の基幹相談支援センターにアンケートを取り、課題は何か聞いたところ、入所施設が少なく、最終的な受入れ先を探すのが困難であるとの回答が一番多くありました。断らない相談を目指していても結局断るではないかと言われます。日中サービス支援型であれば市内で探すことは可能ですが、家族の希望と異なったり、支援力が不足していたり、入所継続が困難になる事例もあり、課題は多く、入所施設は市内では難しく県外で探すことが多いとの回答もありました。自分の地域で暮らすことができないのが現状です。

地域で社会資源が本当に足りているのか精査することが必要です。相談支援としては、直接支援ができないので社会調査がとても大事で、実態を把握することが必要です。足りなければ福祉計画に位置付けていくことをしないと、断らない相談をやっていくことが難しいと思います。

●報告――ふる里学舎蔵波　施設長　松橋達也

佑啓会は、平成5年に市原市にオープンし、養護学校卒業後の暮らしの場、活動の場の確保等から巡回外来相談等を行ない、在宅のニーズを把握し、それに応えるために事業を拡大してきました。ニーズに応えるために、できない理由を考えるのではなく、どうしたらできるのかを考えてきました。ニーズに応えていくためには、人材確保、職員の教育、法人理念の浸透、ガバナンスの強化が必要です。

蔵波にある心静寮は、令和3年にオープンした強度行動障害者のための棟になります。延べ110名の内15名が心静寮で生活しています。

今日は暮らしの場支援会議を経て、蔵波で受けている2名の方の支援状況をお話します。

1人は、行動関連項目21点、支援度関連項目14点、重度の強度行動障害が認められています。すでに女性棟では行動関連項目15点以上の方が6名生活をしていました。心静寮の方と接していた強みと女性棟での受入れ実績があったため、スムーズに受入れができました。彼女は日常生活のあらゆる場面で強い拘りがありました。拘りの1つが、食事場面で自分が食べ終えると、電気を消し、カーテンも閉めてしまいます。入所後しばらくの間は支援方針を統一せずに行動観察に努めました。その結果、彼女の拘りを止めると激しい興奮状態、自傷、他害に至ることがわかりました。そこで他者や自身に著しい影響を与えない拘り以外は静観する対応を徹底しました。すると、一連の行為を終えて次の行動に移ると拘りが消去されることがわかりました。

そういったことを踏まえ、支援に活かしております。

彼女の支援には試行錯誤しましたが、ポイントとしては一緒に暮らす利用者へのフォローが重要だと思います。当事者への支援に目が行きがちですが、一緒に暮らす人への支援、フォローがむしろ大変だと思います。

また、経験の若い職員が少しでもゆとりをもって利用者と向き合えるように、朝夕の慌ただしい時間帯には人を多く配置しました。ゆとりを持って向き合えることが一番大事だと思います。

もう1人は心静寮で生活をしている行動関連項目、支援度関連項目ともに18点を超える最重度の強度行動障害者の判定を受けている方です。この方は複数の疾患を併せ持っていますので、医療的アプローチも非常に重要になってきます。施設でいかに環境を整えてもうまくいかず難しい方です。情緒不安定時には激しい他害、器物破損等の行動があります。過去に部屋の洗面所の小さなすべり出し窓が壊され、外に出て行ったこともありました。入所してから3ヶ月間心静寮で過ごし、3ヶ月間病院に入院していました。現在では彼も環境に慣れてきたし、職員も慣れてきました。この1年程入院はしておりません。

どんなことを考えながら支援をしてきたのか。心静寮を利用する方は今までの生活で支援困難と周囲から言われ、課題となる行動に対してのアプローチはされていても、落ち着いている時の支援は重要視されてきませんでした。ありがとうございます、助かりますと称賛する機会を多く作ろうと、自己肯定感を高めるための支援をしました。また、不適切な行動を起こさせない環境設定、攻めの姿勢で不適切な行動を起こす背景を探って、それが起きないような環境作りをしました。利用者の状況に応じた柔軟な勤務体制、必要な時に必要な人員を配置すること、これは絶えず変化するので、1回決めたから終わりではなく、その利用者の状態に合わせて常に変化させていきます。もう1つはベテランが率先して現場に入る、これがポイントだと思います。

開所当時は、全職員が緊張感、緊迫感丸出しで利用者と向き合っていました。もともと不適切な環境の中、ストレス等が蓄積し、行動障害に至ってしまった方が多いので、とにかく1人1人にとって居心地の良い空間作り、環境作りにつきると思って取り組んできました。そんな中行事は非常に大事で、楽しみにしてくださる方が非常に多いです。外出することで違った一面を見ることができるのは、職員にとっては楽しみの一つであります。日々の支援は非常に難しいことが多くて悩みや苦しみもありますが、こういった時にこの仕事をしていて良かったと本当に心から思える瞬間です。

●質疑応答――副会長　佐久間　智

佐久間　伊藤さんに質問です。1点目は相談事例の多い8050問題について、相談支援ではどう調整していますか？2点目は、アンケート調査の結果から、入所施設のような居住支援が少なくて困るという相談が一番多いが、国は5％の入所施設の削減を打ち出しています。居住支援が少ないことに対する考えを聞かせてください。3点目は千葉市の自宅で暮らしている重い障害のある方に必要なサービスや足りないことは何か、この方達が在宅で暮らすためのサービスは何かを教えてください。

伊藤　8050問題は、親の思いと本人の思いが違っていて、歳を取ってから福祉施設に繋がることは難しく、大変苦慮しています。まずは福祉施設を利用して、時間をかけて楽しむことを経験して、その中で意思決

定をしていくことが大事です。

入所の削減について、千葉市は前回の障害福祉計画から削減目標の設定はしておりません。令和元年の千葉市の移行調査によると、在宅の障害のある方の約4人に1人が施設入所を希望しています。親の意向もあるかもしれませんが、資源としてはかなり足りないことを感じています。グループホームがいいのか施設がいいのかいろいろとありますが、松橋さんの話にあるように、行動障害がある方に適切な支援をできる人材を育成していることがとても大事です。そういった方を育成するのはグループホーム単体だけでは難しく、通所や入所で対応していかないと難しいと考えております。

サービスの足りない部分について、これこそ今千葉市で実態調査をしようと思っております。皆さんがどんな支援が必要か私もまだわからないので、この辺りを調査して精査していこうと思っております。

佐久間　松橋さんに質問です。職員のモチベーションの維持等への取り組みや職員育成についてどんなことをしているのか。また、病院とうまく付き合っていくことで苦労されていることをお聞かせください。

松橋　ふる里学舎としては、強度行動障害者の方達を受入れることが仕事だと思っていたので、スムーズに引き継がれています。入所施設を運営することができる社会福祉法人の責務としてこういった人達を積極的に受入れていくことが原点だと思います。受入れを躊躇する要因として、職員の質、ノウハウがない、職員が足りていない、行動障害の方と向き合うことによって疲弊してしまうのではないか、事故があった時にどうするのか等があるという話は聞きました。それに対応するには、若い職員に任せるのではなく、経験豊富な職員が先頭に立ち、苦労しながらしっかり向き合うことが基本だと思います。モチベーションの維持は、それに対する評価、報酬も含めての評価だと思います。

会場の様子

行動障害の方を受入れる上で医療機関との上手な連携が必須で、ある病院とは持ちつ持たれつの関係でやっています。もう1つは保護者、関係機関、特に行政、相談支援専門員との信頼関係の構築です。事故のリスクは常に付きまとい、虐待、不適切な支援とは隣り合わせの環境です。ここの理解がしっかりないとできません。そもそも論として、プロ意識を社会福祉法人の職員として持つこと、その教育からしていく必要があると思います。

佐久間　ありがとうございました。最後に皆さんにメッセージをお願いします。

伊藤　今日はありがとうございました、協会で横の繋がりができるのはすごく大事だと思っており、昨年度入会させていただきました。身体で知的を伴う方の支援が増えていることもあり、こういう会に参加することで結束ができるなと思っております。これからも一緒にやっていけたらと思っておりますのでよろしくお願いします。

松橋　それぞれの事業所の強みを活かしてやっていくことが1番かと思います。千葉県は協会の横の繋がりが非常に強いので、一緒にいろいろな法人の人といろいろな情報交換をして頑張っていけたらと思っております。これからもよろしくお願いします。

佐久間　我々が一生懸命運動することで制度が少しずつ変わると思います。皆さん一緒に歩んでいきたいと思います。ありがとうございました。

●講演　落語家　江戸屋　猫　八　氏

冒頭、江戸屋代々に伝わる鶯の鳴き声で講演は始まりました。

江戸屋代々の教育として、小さい頃から芸事に専念するのではなく、人の部分をいかに磨くかが大事で、それによりその人らしい芸の色ができます。学業、部活と伸び伸びと高校まで行きましたが、高校3年の秋、突然病気になり約1年の入院生活を送りました。その後自宅療養をしましたが、ちょっと体調を崩すと再発することを繰り返していました。そんな療養中で学んだことは、1つは自分自身に今できることがあることに感謝するようになったこと、もう1つは誰かと一緒に過ごしていることは、その人の時間を頂いているということです。人とのご縁を大切にしないといけないことを病気から学びました。

江戸屋猫八氏講演

楽しく生きる3つのコツとして、「つ」で始まる3つの言葉をとても大切に今日まできました。「つくる」「つなぐ」「つたえる」。つくるのは時間。気持ちをちょっと切り替えて自分に時間をつくる。時間がつくれたら、つなぐ。人との縁をつなぐ。そして最後につたえる。つたえるのは思いです。誰かと縁をつないでその時その時の思いをつたえる。思いをつたえることで、自分の価値観の外にある刺激を得ることができます。大きな目標を立てて挫折するのではなく、小さなことからコツコツと3つの「つ」を積み重ねることで未来がつくることができます。

また、過去は変えることができませんが、過去の価値は変えることができます。自分の心の中に目を向けた時に、自分の磨き方一つで価値に輝きをつけられる過去があった時には、その過去と向き合って、磨きをかけて、輝きを増すような今日の歩き方をしていくことが大切だと思います。

講演の合間、合間に猫八氏の芸である様々な動物の鳴き声を交え、会場を沸かせてくれました。貴重な講演をありがとうございました。

里見会長の挨拶に始まり、実践発表、講演と盛り沢山の内容だったのですが、誌面の都合上止む無く割愛させていただいた部分があることをお詫び申し上げ報告といたします。

広報委員会

第8回 障害児支援セミナー開催報告

第8回障害児支援セミナーが令和6年1月30日に千葉市文化センターにおいて、千葉県内の児童発達支援事業、放課後等デイサービス事業、障害児入所施設を対象とし123名の参加者を迎え開催しました。

今回のテーマは、「子どもの発達に応じた支援」です。私たちは、現在の障害児通所支援や入所支援の枠にとどまらず、ライフステージに応じた切れ目のない支援の推進と関係者とのスムーズな連携の推進の重要性が指摘されています。また、障害の概念にとらわれず子ども達の発達・成長過程において、私たち支援者が子ども達の育ちに合わせたよりよい支援を一緒に考えることを趣旨としました。

光真坊浩史氏講演と会場の様子

午前は、一般社団法人全国児童発達支援協議会理事・光真坊浩史氏を招き「子ども発達段階に応じた支援」と題しご講演いただき、午後は児童発達支援センターからBring upちば子ども発達センター施設長・小山恵美子氏、放課後等デイサービス事業から株式会社トーマス千葉県統括本部長・達崎浩典氏、障害児入所施設から社会福祉法人大成会不二学園・五十嵐健氏による事例発表をしていただき意見交換を行いました。

光真坊氏からは、発達支援は子どもと家族のWell-Beingを目指すもので、子どもが安全・安心に豊かに過ごし、子どもなりの発達を否定されず、子どもなりの発達を遂げられるように合理的配慮を行い、そのための発達に応じた環境づくり、関わりが重要であるとしています。「発達的視点」を持ち、子どもの発達のアセスメントと働きかけのための発達のプロセスの理解と特性の理解が必要です。また、発達支援は、障害や特性の消去を目標とはしていませんが、保護者ニーズは「障害」「特性」「困った行動」の消去になることが多く、私たち支援者は保護者のこの心情に寄り添うことが非常に大切で、「障害」や「特性」はダメなものとして捉えずその子を否定しないことから支援はスタートするものである。だからこそ「障害」や「特性」の正しい理解が前提になってきます。「障害」や「特性」は配慮することで補われ、育てられるとした。発達段階を丁寧に説明され、こどもとして必要な支援のひとつにアタッチメントの視点が重要であり子どもが成長する上で土台になっていること、また、「自尊心」を育成、尊重する支援もアタッチメントの上に成り立っていること。発達段階に応じた支援に向けては、まず安全・安心であること、しっかりとこどもの様子を観察すること、子どもが主体性を発揮できる環境を提供することとし講演を締めくくりました。

事例発表では、まず小山氏の児童発達支援センターでは「できないことを子どものせいにしない」という考えのもと療育支援、ご家族への支援や地域への支援を行っています。就園にむけて幼稚園と連携した事例について発表されました。言葉の遅れや癇癪を起こすことが多く対応に苦慮したお子さんが、幼稚園のプレから入園をあきらめ、発達センターにつながり発達支援中心の通園室に入園し発達支援を開始。経過の中で、他幼稚園のプレ保育に再チャレンジをした。その背景には幼稚園とセンターの連携や情報共有する環境を提案したことで他幼稚園に入園された事例でした。

達崎氏からは、集団活動療育プログラムを中心に取り組まれ、運動やソーシャルスキルやライフスキルプログラムとして、社会性のルールを身につけるために座学や公共の場を利用しマナーやルールを身につけていく活動をしています。また、生活をしていくためのスキルを身につけ、野菜や花を育てることや楽しく音楽に触れあうことに取り組んでいます。保護者との交流や活動の拠点の神社内の清掃を行い、今後は世代間交流や障がい児への理解を深めて頂けるような取り組みをしていきたいと発表されました。

五十嵐氏からは「自分らしく生きる」をテーマに15歳男児の事例を発表していただきました。両親とも重度の精神疾患を抱え日常生活を送ることもままならない状況でなおかつ育児は不可能と両親は考え、医師からの助言もあり入所に至ったケース。困った行動を分析し良いところに目を向け、行動を整理し支援方針を職員間で共有し関係機関との連携することに取り組んできました。入所後障害診断を受け障害特性が問題行動とみられてしまったこと、行動の本質を見極めることや生活の決まり事や約束事を決めるときは本人と一緒に考え決めていくこと、障害特性を理解し支援につなげることで「自分らしく生きる」ことに繋がると発表されました。

セミナー終了後のアンケートにおいて、発達段階に合わせた支援が必要と再確認でき、意識を変えるきっかけになり今後活用していきたい、他施設の取り組みがよくわかり参考になったなどのご意見をいただきました。今後も横の繋がりや支援力の底上げのきっかけになるセミナーを継続し企画をしてきたいと思います。

児童発達支援部会長　**新福　麻由美**

権利擁護部会主催研修報告

権利擁護の観点から記録のとり方・大切さを学ぶ研修会

日程：令和6年1月29日
会場：社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会「でい・さくさべ」

権利擁護委員会研修担当
木更津中郷丸　生活支援員リーダー職　宮口　貴子

権利擁護委員会による対面研修の開催は、4年ぶりとなりましたが県内各施設から約60名の職員が参加して下さいました。

今回の研修は「権利擁護の観点から記録のとり方・大切さを学ぶ研修会」をテーマとして、日々直接支援に携わっている職員の皆さんがグループワークの中で学び、よりよい記録がとれるようになる為、企画しました。

始めに権利擁護委員会の吉田委員長より、福祉業界での最近の虐待事案について報告があり、障害者虐待防止法施行後もたくさんの虐待事件があるということ、よりよい支援を目指すことで虐待防止に繋がるという趣旨の挨拶がありました。

グループワークでは、担当委員がファシリテーターとなり、1グループ7名程度、10グループに分かれ、2つの討議内容について話し合いを行ないました。本題に入る前には自己紹介カードを用いて、各自の好きな食べ物や嫌いな食べ物、マイブームを話す事で、最初は緊張気味だった参加者の皆さんも、和やかな雰囲気の中話し合いを進める事ができました。。

前半のグループワークでは、「日々の記録～読み手がどう感じるか～」について、実際に各施設で記録された事例をもとに、まずは個人で気になる記録とその理由を考え、その後グループ内で意見交換を行ないました。

後半のグループワークでは、「よりよい記録を目指して」について、不適切な例文を誰が読んでも不快に感じない記録に直し、記録をとるにあたり気を付ける点をグループ内で話し合いました。

どのグループも活発な意見交換を行ない、「読み手のとらえ方」「事実」「言葉の選び方」等、気を付けるべき点を明確にすることで、よりよい記録がとれるようになるのではないかとの意見が聞かれておりました。また今回の研修の内容を各施設で伝達し、共有することの必要性を感じている姿が見られました。まとめとして、権利擁護委員の多田施設長より、記録の内容や表現には日頃の利用者様に対する「まなざし」がそのまま出るとの話しがあり、普段の支援に対する姿勢や利用者様への対応を改めて見直すよい機会になったのではないでしょうか。

今後も権利擁護委員会では、職員の皆さんの支援に対する悩みや思いに寄り添った研修を企画し、実施してまいります。

権利擁護部会研修に参加して

社会福祉法人槇の里　いすみ学園
統括主任　片岡　彰則

令和6年1月29日(月)同委員会主催の「権利擁護の観点から記録の取り方、大切さを学ぶ研修会」が、社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会「でい・さくさべ」にて開催され、参加させて頂きました。

今回のメインテーマは表題の通り「記録」を主としたもので、まさに利用者支援の根幹たる内容でした。

始めに、社会福祉法人薄光会「豊岡光生園」の多田施設長より開会の挨拶、その後委員長である社会福祉法人かずさ萬燈会「かんてら」管理者の吉田氏より近年の障がい者虐待の現状報告が行われ、年々その件数が増加傾向にある事を改めて感じる事が出来ました。

研修はグループワークがメインの二部構成で、まず一部では「不適切な記録」のどこに「課題、問題」があるかを各自で確認し、グループ内で共有を図りました。この課題で使われた記録は実際の千葉県内の施設の職員が書かれた記録であり、その内容や書いてある事柄に驚かされました。記録の書き方やその内容は日々の支援をする中でも多々思う事があり、他の施設でも同様の書き方がされている事には正直驚かされました。参加しているグループメンバーからも同様の意見は多く、施設を問わず支援職員としての価値観や考察は共有されている事を認識する事が出来ました。しかし、やはり各施設その考えが全体にまで浸透していない現状もある様で、問題に対する共有の必要性を感じました。

二部では「不適切な記録」を適切な内容に修正するテーマで、グループ内で意見を出し合いました。題材となった事例は、一部の内容を除き不適切さをあまり感じない文章でしたが、「背景が見えない」「職員の対応が載っていない」等私自身も気づかない指摘が多々あり、今回の研修の意義を感じる事が出来ました。

今回の研修に参加して感じた事は改めて「記録」に対する認識のズレを、施設内で共有しなくてはならないと感じました。日記の様な記録、第三者が見たら驚くような内容等もあり、恥ずかしながら、今回の研修では我々の施設の記録も例として挙げられており、施設内でも記録の大切さを伝える研修の必要性を感じました。我々の法人では現在ＩＣＴ化を進めており、それは職員の負担軽減を主目的で進めて来ましたが、それと同時に記録の内容が簡素化してしまい、非常に乏しい物となってしまった現実があります。本来記録というものは、その方がそこで生活をしている事を証明するものであり、医療的な側面等多様な方面で「根拠」となるものなので、必要な情報を客観的な視点で書かれていなければなりません。多田様より、「５Ｗ１Ｈ」が基本となる、「記録の内容、表現には日頃の利用者に対する「まなざし」がそのままでる」とのお話がありましたが、正にその通りであり、日頃どれだけその利用者さまに関わるかで、その内容や質は変わってくると思います。今回の研修で学んだ事を施設に持ち帰り、職員各々に記録の大切さを伝えて行きたいと感じました。

支援スタッフから見た！ わが施設の自慢・アピールポイント㊹

平成20年度から43回にわたり107の“プチ自慢”をご紹介してきましたこのコーナー。今回は２つの“プチ自慢”です！

安房・君津・市原ブロック…社会福祉法人九曜会…千原厚生園

～楽しくて安心な生活を～

施設の外観

ドリップコーヒーにチャレンジ

園内いちご狩り

千原厚生園は、市原市北東部にある障害者支援施設です。

法人としては、令和６年２月で創立34年を迎えました。また、令和８年には、新しい建物になる予定です。設計の段階から職員みんなで、どんな設備が必要か話し合い、ご利用者の方々が暮らしやすい建物を目指しました。

千原厚生園では、平日はご利用者個々の適性に合った５つの作業班にて、作業を行って頂いています。休日となる土日は、６～７名のご利用者がカフェや100円ショップなど、希望の行き先に行く余暇外出を行っており、月に１回は、ご利用者と一緒におやつ作りも行っています。

他にも、充実した余暇提供を目指し、４つに分かれている各寮の担当者がアイデアを出し合って様々な余暇活動を提供しています。最近では、コーヒーが好きな方が多い男性寮にて、本格的なコーヒーを淹れるのにチャレンジしました。コーヒーの豆を挽くところから体験していただき、皆さん興味津々で取り組まれていました。以前の感染対策の兼ね合いで中々外出が難しい時期には、どうにか楽しめないかとの事で、女性寮では、園内にていちご狩りを行いました。物干し竿をいちごの蔓に見立てて、いちごをくっつけてみました。皆さん、とても楽しそうにいちご狩りをしていらっしゃいました。

これからも、ご利用者が楽しく安心な暮らしの中で、笑顔が沢山咲くように、職員一同アイデアを出し合っていきたいと思います。

リーダー支援員　湯本　綾郁

夷隅・長生ブロック…社会福祉法人つばさ…いすみあかね園

～明るい我が施設～

施設の外観

平飼い養鶏と販売している卵

千葉県のいすみ市は自然豊かで言わば田舎そのもの。山の中に静かに佇む、生活介護事業所いすみあかね園。そんなローカルな土地に元気に響き渡る36名の利用者さん達の声は、裏山にこだまし、それに負けずと職員の活気ある声も被さる。そんな元気な施設にも悪夢の様なウイルスの脅威がやってきたのは４年も前。当時は元気な声も遊びも全てが規制され窮屈な思いを皆が経験。それも昨年５月に緩和されると、今までの我慢を爆発させるかの様にこだま再開。やっぱり元気が一番！しかし喜んでいるのも束の間。皆が元気になるという事は職員も負けていられない。暫く縮小していた活動が再開となると、わずか４年前の記憶の引き出しがなかなか出てこない。そこも元気でカバーというわけにも行かず、皆で四苦八苦という気持ちも、いい思い出とプラス思考に変換し、いざ活動開始！

現在は生活介護事業所の中で、アルミ缶のリサイクルや農園芸・平飼い養鶏と卵の販売等を中心に行う他、季節に応じジャムや干し芋、えごま油等の加工品制作に取り組んでいます。年数の浅い加工品は職員がまだまだ勉強途中のため、模索しながら改善を…と取り組んでいるところです。その背中を押してくれているのは、やはり「おはよう・お疲れ様」の元気な利用者さん達の声。この自然豊かな中で育ってきた人達の強さと優しさを十分に感じられる場所。

それが「いすみあかね園」です

生活介護事業所　支援員　斎藤　貴美子

新事業所紹介

社会福祉法人みらい工房
みらい工房つむぎ

～新しい歴史を紡いでいく「みらい工房つむぎ」～

令和5年4月市原市菊間にオープンした「みらい工房つむぎ」です。

法人としては、市原市で初めての生活介護事業所になります。同市ではすでにグループホームと相談支援事業所の運営を行っておりましたが、このみらい工房つむぎを拠点として、更に幅広い事業展開を行っていければと考えております。

事業所の名称「つむぎ」には市原という土地で、みらい工房の新たな歴史を紡いでいきたいという想いが込められています。

活動の柱として「働くこと」を意識して、屋外と室内に分かれて作業を行っています。

屋外では畑は隣接した荒地を耕しながら砂利拾いや土ふるいなど利用者とともに一から手作業で行い、日々汗を流しながら季節の野菜作りを行っています。

室内では、箸の切り離し作業や袋詰め等の受注作業と空き缶やペットボトルのリサイクル作業を行っております。

また、敷地内の中庭も広いため昼休みや余暇時間は利用者と一緒にキャッチボールやバトミントンなど体を思いっきり動かして楽しく過ごしています。

みらい工房つむぎは平屋、木造建築だからこそのアットホームな雰囲気が魅力です。ぜひ見てほしいポイントは館内の廊下です。天井まで吹き抜けとなっており、木の梁が温もりを感じさせるとともに、天窓からは、暖かな陽光が取り込める構造となっており、素敵な空間になっています。

運営スタートからまだまだ日が浅く、利用者と職員で日々試行錯誤を繰り返しですが、お近くにお越しの時には気楽にお立ち寄りいただければと思います。

生活支援主任　金坂達也

外観

中作業

畑仕事

第51回「手をつなぐ作品展」を終えて

今年も、手をつなぐ作品展を、県内3地区で開催することが出来ました。特に、南部地区は、今回会場が「イオンモール木更津」になりました。参加事業所は、北部19、中部36、南部16と、新型コロナの時期からは大幅に回復し、各会場とも大いに賑わいました。たくさんの方に、「障害の理解と可能性」を感じていただけたと思っています。次回も、よりグレードアップしたイベントになるよう頑張っていきます！みなさんもどうぞ会場にお越しください！

ユニモちはら台（中部）

第51回　開催報告

南部地区
開催日／令和6年2月16日(金)～18日(日)
会　場／イオンモール木更津
売　上／約105万円

中部地区
開催日／令和6年2月16日(金)～18日(日)
会　場／ユニモちはら台
売　上／約115万円

北部地区
開催日／令和6年2月26日(月)～28日(水)
会　場／イオンモール八千代緑が丘
売　上／約115万円

千葉知協トピックス

スポーツ文化委員会　藤崎　明

第27回 千葉ゆうあいピック駅伝大会

本協会が後援する第27回千葉ゆうあいピック駅伝(千葉県知的障害者陸上競技協会等主催)が、令和6年1月14日(日)千葉県総合スポーツセンター陸上競技場で開催されました。当日は最高気温が10度前後と冬らしい一日でしたが、終日晴天の中36チーム153名のアスリートが集い、暑い戦いが繰り広げられました。

メイン種目ハーフ男子(6区間19・61㎞)では1区(4・97㎞)で2018アジアパラ・ジャカルタ大会陸上1500m日本代表の安西伸浩選手と800mのアジア記録保持者米澤諒選手(ダイバーシティ)という日本を代表する選手が激突。長距離に少しだけ長けた安西選手が逃げ切って区間賞を獲得しました。続く2区(1・47㎞)は市川大野チームの石村正太選手が区間賞を獲得しましたが、チームは3位。トップを奪ったのはダイバーシティの松本吏功選手で、区間3位ながら着実に走りました。松本選手は昨年鹿児島で行われた全国障害者スポーツ大会走幅跳の千葉県代表選手でした。3区(2・80㎞)ではおなじくダイバーシティの東雄飛選手が区間賞を獲得しました。4区(2・80㎞)はひかりのむらチーム中田尚平選手が昨年3区区間賞の走りで区間賞を獲得して一矢を報いました。5区(2・80㎞)は同じく鹿児島大会400mの千葉県代表眞次駿英選手(ダイバーシティ)が区間賞を取って後続を引き離しました。アンカー6区(4・77㎞)には5000m元日本記録保持者の米倉智弘選手が安定した走りで悠々区間賞、ダイバーシティチームの圧勝となりました。ひかりのむらチーム2年連続で準優勝、3位は前年度優勝の市川大野チームでした。その他の部門の主な成績は次の通りです。

エイスの部スタート～県総合SCで

【クォーター(5区間9・88㎞)】
男子＝優勝：ふる里学舎、準優勝：市川大野
女子＝優勝：安房職連合軍

【エイス(3区間4・88㎞)】
男子＝優勝：ふる里学舎C、準優勝：ふる里学舎D、第3位：市川大野B
女子＝優勝：市川大野、準優勝：富里福葉苑、3位：佐倉福葉苑
壮年男子＝優勝：富里福葉苑A、準優勝：富里福葉苑B、3位：富里福葉苑C
壮年女子＝優勝：ひかりAC

【ロードレース】
男子＝優勝：室井雄人(ふる里学舎)、準優勝：木村虎太郎(市川大野)、3位：石山冬真(ふる里学舎)
女子＝優勝：遠藤彩佳(富里福葉苑)、準優勝：作田晴枝(富里福葉苑)、3位：高山悦子(ひかりAC)

成績の詳細は千葉県知的障害者陸上競技協会のHPに掲載される予定です。
https://makinomikai.jp/association/

令和6年度 スポーツ行事予定

●千葉県障害者スポーツ大会

【陸上競技】
5月26日(日)　千葉県総合スポーツセンター　陸上競技場
【卓球】
6月2日(日)　千葉市花島公園スポーツ施設　体育館
【ボウリング】
6月2日(日)　アサヒボール
【フットベース】
7月7日(日)　千葉県総合スポーツセンター軟式球戯場・ソフトボール場
【ソフトボール】
日程調整中　重兵衛スポーツフィールド中台北羽鳥多目的広場
【フライングディスク】
10月3日(木)　千葉市青葉の森スポーツプラザ　陸上競技場
【サッカー】
11月10日(日)　市原スポレクパーク
【バスケットボール】
11月24日(日)　船橋市運動公園体育館
【バレーボール】
12月8日(日)　バルドラール浦安アリーナ

事務局便り

事務局長　千日　清

能登半島地震による大きな被害に心からお見舞い申し上げます。進みにくい復旧と、支援の困難さ。同じ半島である房総でも、大きな教訓として捉えなければなりません。

一日も早い復興を願います。

編集後記

おおはし園　成川　真

気が付けば桜が咲く季節になりましたね。振り返りますと、予期せぬ災害や不信になってしまいそうなニュースを思い出して心が重くなりがちです。

来年度は、お互いが相手を思いやり心が温まるような年度になっていきますように。